

マルクスと貨幣的経済理論

三 上 隆 三

〔I〕

イギリス古典派経済学以来の伝統であった、経済分析にあたっては実物タームで考えるべきであって、貨幣はそのあとで申訳け的に挿入すればよいといった思考様式を排し、貨幣・貨幣的要因を経済の有機的要因として包摂し、貨幣的経済の最も発達した段階としての資本主義経済の完全な理論を樹立しようとするものこそ貨幣的経済理論にほかならない。しかしながら世の多くの、いわゆるマルクス主義経済学者は、貨幣的経済理論に対して偏見のようなものをもっているようである。その理由として、今日までに、貨幣的要因の重視さるべきことを強調した人物の多くがウィクセル、ホートリィ、ハイエク、ケインズ等のいわゆるブルジョア経済学者であり、したがって貨幣的経済理論はブルジョア経済学の一つであるとの先入主をもち、ブルジョア経済学はマルクス経済学のとらぬところであるとの心理的態度から貨幣的経済理論に対する十分の理解をもちえなかったものと考えられる。しかしそれよりももっと重要な理由として次のことが考えられる。すなわちマルクス経済学の特徴の1つは、すべての経済現象を解明するにあたって、生産過程にまで問題を掘下げることによって完全な分析を行うという点にあるが、その生産過程の重視ということが、貨幣の本質的作用を重視し強調する貨幣的経済理論をもって流通主義的経済学と同一視せしめ、一方では貨幣的経済理論を誤解し無関心ならしめ、他方において自らは生産重視の美名のもとに古典学派と同じ実物経済学を主張するという誤れる道に足をふみ入れているのである。

くりかえしていえば、貨幣的経済理論の強調するものは貨幣のいわゆる経済実体との関係・作用であって、それはもちろん生産過程に直接にむすびつくものであり、したがって貨幣的経済理論は決して流通主義の経済学ではありえないのである。しかしかかる貨幣的経済理論をもって流通主義の経済学であると解するその背後には、貨幣は流通過程をその活躍分野にしているものであるから、貨幣の動きを重視するということは流通主義たらざるをえず、このことはマルクスの生産重視の思想とは相容れないものとの考えがあり、かくて貨幣的要因の軽視へとはしらせたのである。この典型的な例として、われ

われはスウィージーをあげうるであろう。彼はアメリカ随一のマルクス経済学者であるといわれているのであるが、「マルクス経済学原理」という副題をもつ彼の主著『資本主義発展の理論』(*The Theory of Capitalist Development*, 1942)には、マルクスが長年の心血を注入して完成した貨幣理論の姿を見出しえず、完全に無視しているのである。すなわちスウィージーはマルクス経済学を全面的に実物的経済理論化してしまったのである。しかしながら、マルクス自身は貨幣を重視しているのであって、彼の経済理論は、例えば『資本論』を取上げてみれば明白なことなのであって、貨幣的経済としての資本主義経済の完全な経済理論の樹立を目的とした立派な貨幣的経済理論なのである。これを実物的経済理論化することは、マルクス経済学の後退でこそあれ、決してその展開・発展とはいえないのである。

〔II〕

マルクスの『資本論』は第1巻のみが彼自身の手で刊行され、第2巻以下は、友人のエンゲルスの手によって編集・上梓されたことは周知の事実である。そしてマルクスの書きのこした草稿よりの編集がいかに困難なものであったかについては、それぞれの巻頭につけられたエンゲルスの序文の明かにしているところである。ところで『資本論』第2巻は資本の流通過程を研究の対象とするものであり、その第3篇「社会的総資本の再生産と流通」では有名な再生産表式とともに再生産論が展開されている。この第3篇の再生産論はマルクスがのこしたノート第2稿と第8稿とより編集されたものであるが、エンゲルスによると、この第3篇は全面的に書きかえることが必要であるとマルクスは考えていたとのことである。その理由は、第2稿では、再生産がまずそれを媒介する貨幣流通を全く顧慮することなしに論述されていたのであるが、更にもう一度、貨幣流通を顧慮して再生産が展開されているからである。そこでこの部分を削除して、全篇が総じてマルクスの拡大せる視野に照応するように、すなわち貨幣という実在物を十分に考慮して書改めねばならなかったのである。かくして出来上がったものが第8稿であるという¹⁾。このようにマルクスはまず再生産論を古典学派流に貨幣抜きの実物的理論として展開し、後

にその非を悟って、貨幣を有機的に織りこんだ貨幣的理論としての再生産論を展開したのであって、ここにマルクスの失敗と苦心、そして貨幣的経済理論家としてのマルクスの一端をうかがいうるのである。しかしこのような貨幣的経済理論の建設者としてのマルクスが、いわゆる近代経済学の人々はもちろんのこと、マルクス主義の人々によっても余り知られていないということは不思議を通りこして不当であるといわなくてはならない。

では、なぜマルクスがわざわざ実物的再生産論を訂正し、貨幣を織込んだ再生産論を展開しなければならなかったのであろうか。マルクスの再生産表式形成にとって多大の影響を与えたものにケネーの経済表があるが、その経済表において貨幣の流通が重要な役割を果しているからというような簡単な理由に解消しうるような問題ではなさそうである。今日、経済理論を分類する基準の1つとして徹視的経済理論と巨視的経済理論との区別がある。徹視的理論とは個人あるいは個別的資本の立場から経済を分析するものである。しかしながら個別的な視点より経済をみる場合、ともすれば全体としては不可欠な要因を軽視しがちになりやすい。すなわち全体としての視点より経済社会を見る場合には、経済の再生産可能のためには消費財の生産部門のみではなくて生産手段の生産部門の存在を不可欠とすることが明白であり、したがって生産構造を分析する場合、2部門分割ということが絶対条件になる。しかるに個別資本の立場よりみれば、他の生産部門は所与とすればよく、したがって2部門分割の意義は軽視されることになる。

貨幣も同様であって、資本主義経済を全体としてみれば貨幣の存在は事実であるのみならず、不可欠の要因であり、その存在の必然性も明白になりうるのであるが、個別資本の立場よりすれば、貨幣はいわば外部から注入されるものであり、かつ外部へ流出するものと理解され、またそのように所与のものとして取扱ってもさしたる支障はないわけである。ましてやわれわれの日常的経験からの浅薄な考えが、貨幣なくしても現物さえあれば、少々不便はともなうとはいえ、十分に生活しうるという錯覚を生む場合においては特にしかりである。このような個別資本の視点が経済全体を理解するためのモデルとして取上げられ、そこにおいてえられた諸原理諸法則がそのまま経済全体に拡大適用されるならば、貨幣はあくまでも外部より与えられたものと理解され、したがって貨幣は実物的経済を論じた主たる諸章のあとで、申訳け

的に論及すればよいということになる。部分研究の単純な集積からは資本主義社会における貨幣存在の必然性は究明されえないのである。全体は部分の単なる集計以上のなものであるからである。マルクスの再生産論はその再生産表式とともに、近代経済学者によっても極めてすぐれた巨視的理論として高く評価されているように、マルクスは再生産を社会全体の視点より考察したのであって、このことが既述の産業構成における2部門分割の絶対性等とともに、貨幣流通の絶対性を認識せしめたのである。もとより貨幣流通の絶対性に関する認識は、巨視的理論でなければできないというものではない。また逆に巨視的理論であれば自動的にそれを認識しうるといったものでもない。既述の如く、最初の再生産論を貨幣抜きの実物的理論にて展開したマルクスがよい例であろう。しかし貨幣というものは元来社会的全体的な性格のものであるから、かかる性格のものを把握認識するのに巨視的な立場の方が徹視的なそれよりもすぐれており好都合であり適切であるということはいいえよう。それと同時に実物的理論の不備を気づかせしめる点においても巨視的理論がよりすぐれているものといえる。マルクス貨幣的経済理論としての再生産論の場合も、彼特有の価値論視点は別として、このような要因が働いてはいなかったとはいいい切れぬ。しかし彼の再生産論を実物的理論より貨幣的理論へと発展せしめたより重大な要因は次のものであろう。

マルクス再生産論の骨格を示すものとしての再生産表式は、資本の再生産・蓄積を全面的に取扱っているものでないことに注意しなければならない。すなわち再生産表式が取扱っているものは商品資本の流通であって、資本の再生産・蓄積も商品資本の流通という視点から考察されているのである。再生産の考察にあたって固定資本の問題が背後におしやられているのも商品としての資本の流通が取扱われているからに他ならないし、又再生産が一方において価値の流通という視点から考察されると同時に、他方では生産部門が生産財生産部門と消費財生産部門とに分割されているのも、使用価値であると同時に価値であるという商品の二重性から必然的に導き出されるものであって、再生産表式の説明にあたって貨幣が導入された必然性もやはり同じく表式が商品資本の視点よりなされたからである。すなわち商品・商品資本はそれが商品・商品資本たることを示すためには、商品の使用価値とともに価値をも同時に実現しなければならない。その商品に投入された労働が社会的に必要な労働であったということの証明をうけなければならない。こ

1) Marx, K., *Das Kapital*. Bd. II (Dietz), SS. 6-7. 長谷部文雄訳(日評社版)⑤ pp. 16-7.

の証明がうけられない場合、商品は単なる生産物になってしまうのである。かかる労働が価値であることを証明するものこそ貨幣なのであって、商品の貨幣との交換の実現はマルクスが命がけの飛躍と形容したように重大な意義をもつものである。商品にとっては貨幣は文字通り試金石なのである。商品に対する貨幣のこの意義は資本としての商品にとっても同様であるのみならず、決定的な意義をもつものである。資本を構成する貨幣資本・生産資本・商品資本の各資本は、その循環において、いずれも貨幣を不可欠の一環としているのであるが、そのうちでも特に商品資本は、販売過程において既に増殖された価値をふくむ商品を貨幣に転化することをもって本来の使命としているのであって、他の貨幣資本・生産資本の場合とは異って、商品販売を使命とする商品資本の場合には商品と貨幣という2因子の同時的存在をもってのみ事態が進捗するのであって、商品資本にとっては他のどれよりも「貨幣流通は決定的に重要である²⁾」。したがって、このことこそが商品資本の流通という視点から作成された再生産表式を骨子とする再生産論において、貨幣抜き価値量のみの計算による実物的理論を一応書上げながらも、貨幣の存在を考慮に入れた貨幣的理論としての再生産論に書きあらためせしめた根本的理由の一つといえるであろう。

マルクスが貨幣的経済理論としての再生産論をめざして苦心したことは既述の通りであり、その意義は大きいのであるが、しかしながらその再生産論をもって現実の再生産を完全に説明するものとするのは早計であろう。彼の再生産論の『資本論』全体系に占める構成上の位置よりくる理論的限界・制約を考慮すれば当然のことであろう。したがってマルクスの残した貨幣的再生産論の意義・限界を明かにし、それを展開することはわれわれにのこされた課題であるというべきである。

さて、貨幣流通を考慮して書改められたマルクスの再生産論ではあるが、そこに登場する貨幣は、上記の限界・制約によって、流通手段としての貨幣が主たるものである。かかる流通手段としての貨幣の登場によって、価値的にも素材的にも過不足なく進行する再生産構造が分析・究明されるのであるが、この流通手段としての貨幣の登場による貨幣的再生産論を、例えば最近におけるクンツの如く「マルクスは、ここでたとえ全貯蓄が再び投資されても、なお均衡せる成長のための特別の束縛がのこっているということを力説するために、セイの市場法

則を利用している³⁾。」「もちろんマルクスはセイの市場法則を容認しなかった。それにもかかわらず、マルクスは均衡せる成長のための特別の束縛を明かにするためにセイの法則をしばらく意識的に活用した⁴⁾」と解している。因に、ここでクンツのいう均衡的成長のための特別の束縛とは、マルクスをして再生産論史上不朽の名を残さしめた彼の発見せる均衡条件—— $IIC=IV+IM$ をさしているのであるが、流通手段としての貨幣によって商品のすべてが過不足なく貨幣に転化し価値を実現し、再生産が均衡を保ちつつ遂行されるとする事態をもって、便宜的、暫定的にもせよ、マルクスがセイの法則を採用したと解することは正しいものであろうか。

セイの法則とよばれているものの内容は⁵⁾、厳密には必ずしも一致していないのであるが、いまさしあたり、ケインズのいう「供給はそれ自らの需要をつくる⁶⁾」をもってその内容であるとすれば、もしもマルクスが再生産論の展開にあたってセイの法則を採用しているとすれば、そのこと当然ケインズが指摘しているように⁷⁾、マルクス経済学は必然的に完全雇用の前提・貨幣数量説を是認する実物的経済理論たらざるをえない。しかしながらマルクスは資本主義における非自発的失業の必然的発生を力説し、貨幣数量説の徹底的な批判者であったのみならず、セイ法則の反対者としても有名なのであって、かかる事実と貨幣流通を媒介にすべての商品の完全消費というマルクス再生産論の内容とは如何なる関係にあるのだろうか。

ケネーがその経済表によって展開した再生産論は、その後約百年にわたって発展せしめられず、イギリス古典派の経済学者達は、その再生産論においては退歩さえしているのである。このケネーの再生産論を批判的に摂取し理論的水準を引きあげたものこそマルクスに他ならないのであるが、それは再生産の秘密をとく鍵たる $IIC=IV+IM$ という再生産のための決定的といえる均衡条件の発見によってであった。マルクスはこの条件の意義を浮彫りにするために、再生産過程を攪乱し不明確化するような一切の諸原因を排除するために種々の前提をもうけている。生産力の累積的増大・外国貿易・競争・信

3) Coontz, S. H., *Productive Labour and Effective Demand; including a Critique of Keynesian Economics*, 1965, p. 76.

4) Coontz, *do.*, p. 152.

5) このことについて、溝川喜一『古典派経済学と販路説』昭和41年、にくわしい。

6) Keynes, *General Theory*, 1936, p. 25.

7) Keynes, *do.*, p. 21.

2) Marx, *Kapital*. II, S. 401. 邦訳 ⑦ p. 93.

用等の捨象これである。したがってこの再生産論は1つの抽象的理論であって、現実と相当の隔りのあることはいうまでもない。再生産論上の貨幣も流通手段として機能しているのであって、再生産を維持するための商品流通に必要な貨幣として導入されたからである。そしてその貨幣量は貨幣の流通速度を所与とすれば、再生産のために売買される全商品の流通を可能にするに足るだけのものである。すなわち再生産論上の貨幣を規制するものは『資本論』第1巻に展開された商品流通に必要な貨幣量に関する原理であって、ヨリ正確にはこの原理の再生産論への適用に他ならないのである。

商品流通に必要な貨幣量の原理によれば、流通貨幣量が商品価格を規制するのではなくて商品価格こそが貨幣量を規制するのであるから、再生産のための商品流通に必要な貨幣量を導入した再生産論はその点において貨幣数量説とは相容れないものであることは当然である。更に流通手段としての貨幣の存在は物物交換 W—W における販売と購買との直接的同一性を販売過程 W—G と購買過程 G—W との対立に分裂させる。そこには販売が購買によってあとづけられないという可能性がひそむわけであって、このことから当然に需要供給の必然的一致をとくセイの法則を否定する結論が導き出されるのである。したがって商品流通に必要な貨幣量の原理を適用した再生産論は、その外見がセイ法則に酷似していても、本質はセイ法則とは無関係のみならず、全くの反対物なのである。W—G—W については「貨幣は、ここでは、価値の貯蔵としてよりもむしろ交換手段としてのみ機能しているのであるから、よもや A なる人物が貨幣を保蔵するということはあるまい。にもかかわらず、取引を阻止する潜在能力は存在する。これこそマルクスがセイの市場法則を容認したそれらの経済学者を嘲笑した理由なのだった⁸⁾」と述べているそのクンツが、資本の再生産というヨリ具体化・複雑化された段階に適用された同じものに対する場合、これをセイの法則であると解したことは、実物的再生産論より貨幣的再生産論へのマルクスの改変の真意を理解しえなかったことを示すものである。

〔IV〕

商品流通に必要な貨幣量の原理は、商品の運動が貨幣を流通させるのであって、貨幣の運動が商品を流通せしめるのではないという考えの上に形成されており、したがってその限りでは貨幣のいわゆる経済実体への積極的作用は全く認められないことになる。しかしこれは理論の純粹的展開のために経済の均衡を前提にしているのであって、したがってあくまでも1つの抽象理論なのである。すなわちこの原理は商品流通に必要な貨幣量は流通する商品総価格によって規定されるということのべているにすぎないのであってそれ以上のものではない。というのは、その原理は流通に必要な貨幣量がつねに流過程に存在するということを主張しているものではないからである。もしもこの原理が、流通必要量の貨幣が現実に何時でもみたされるというのであれば、これはセイ法則そのものに他ならない。現実の流通貨幣量は流通必要量よりも少ない時もあれば多い時もありうるのであって、この原理はかかる事実と両立しうる1つの抽象理論なのである。したがって再生産論に貨幣を導入したということは、マルクスが単に実物的再生産論に後から申訳的に貨幣をつけ足せばよいといった思い付きからではなくて、流通に必要な貨幣量の原理を再生産論に適用したものであり、したがってその再生産論は1つの抽象的理論であるとはいえ貨幣の積極的作用を認める貨幣的経済理論の性格をもつものである。

許与紙幅の都合で詳細は別稿にゆずらねばならないが、全貨幣量を M とし、再生産のために流通する商品総価格によって規制される貨幣量を M_1 、それより流出またはそれへ流入する貨幣量を M_2 とすれば、その関係は貨幣的経済機構のケインズによる数式的表現たる $M = M_1 + M_2 = L_1(y) + L_2(r)$ に酷似しているのである。もちろんこれは現象的酷似にすぎないとはいえ、ケインズがこれによってすぐれた貨幣的経済理論を展開した事実にかんがみ、マルクス理論にも、少なくともケインズ級の貨幣的経済理論展開の素地の存在しているものといえるのである。

8) Coontz, *Productive Labour and Effective Demand*, p. 71.